

The Gosene Church and Kuku People: The Transformation and Current Situation of Christianity in Juba, South Sudan

By Yuko Tobinai

Abstract: The Kuku people, originally from Kajo-keji county at the Uganda-South Sudan border, welcomed Christian missionaries around the early twentieth century. In repeating the move later, they came to be considered as 'people who love God'. They established a prayer area and the Gosene Church, which is one of the Episcopal churches in Juba, the capital city of the young nation, South Sudan. The Gosene Church has now become the 'Church of Kuku'.

In the wake of changes in recent times, the style of worship has also undergone changes, in that the members of the church have become conscious of the role of the church as not only the 'Church of Kuku' but also the 'Church of South Sudan, Juba'.

Many studies discuss Christianity in South Sudan in terms of civil wars and modernization. Few explore diversity of Christians in South Sudan and what kind of Christians emerged as a result. This thesis reveals the features and transformation process of Christianity in South Sudan.

Keywords: South Sudan, Kuku people, Christianity, Ethnicity, Gosene Church, Revival Movement, Migration.

ゴシェニ教会とクク人—都市ジュバから見る 南スーダンのキリスト教¹

飛内悠子

【要旨】ウガンダー—南スーダン国境地帯にあるカジョケジ郡を父祖の地とするクク人は、20世紀初頭にキリスト教宣教師団を受け入れ、就業、内戦によって移動を繰り返す中で「神を愛する人々」となっていった。そして多民族都市、新生南スーダン共和国の首都となったジュバで、自分たちの祈りの場を作り出し、聖公会ゴシェニ教会を設立した。ゴシェニ教会はジュバでクク人の拠点としての役割を果たすようになっていく。

内戦終結、南スーダンの独立によってゴシェニには様々な避難、移住の経験を持った人々が集まり、それに伴って礼拝のスタイルが変容していった。それは教会のメンバーにゴシェニが「ククの教会」としての役割だけではなく、「南スーダンの、ジュバの教会」としての役割も担い始めていることを意識させる。

南スーダンにおけるキリスト教は内戦や近代化との関わりから論じられることが多い。だが彼らがどのようなキリスト教徒となっていったのか、そしてその多様性について論じられることは少ない。本論文では一教会の変遷を詳述することによって、南スーダンにおけるキリスト教の特徴と変容の過程の一端を示すことができるだろう。

【キーワード】南スーダン、クク人、キリスト教、民族、ゴシェニ教会、信仰覚醒運動、移動

¹ 本論文は基本的に2011年9月～2012年8月までの12カ月にわたる南スーダン共和国ジュバ郡、カジョケジ郡でのフィールド・ワークで得られたデータを基にしている。使用言語は英語、ジュバ・アラビア語、バリ語である。なお調査初期にはバリ語モノリンガルに対して通訳を通してインタビューを行っている。この調査は平成23年度、24年度の日本学術振興会特別研究員奨励費によって可能となった。

1. 序論

1.1 はじめに

本論文は、南スーダン共和国 (The Republic of South Sudan)²の首都ジュバ (Juba) におけるクク (Kuku) 人の宗教実践のありようを、「クク人の教会」として知られる聖公会ゴシェニ³ (Gosene) 教会の歴史と人々の活動を追うことによって明らかにする⁴。そしてこの事例を通してキリスト教が内戦、和平後の国家構築を経てきた南スーダンにおいていかに展開してきたのかの一端が明らかになるだろう。本論文の概要は以下の通りである。まず南スーダンにおけるキリスト教の歴史について簡単に述べる。その後クク人の概要を彼らの移動とキリスト教の拡大を中心に説明する。次にジュバのクク人について説明し、ゴシェニ教会の概要と、その活動の実際を見ていく。最後に事例の考察を行い、結論とする。

1.2 南スーダンのキリスト教：概要と先行研究

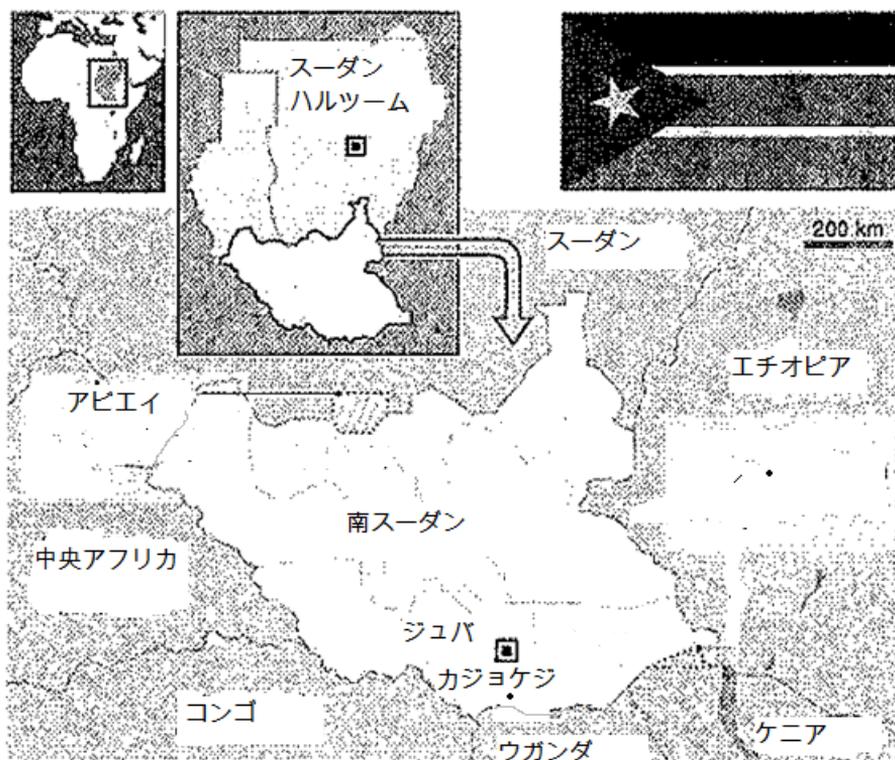
南スーダン共和国は2011年7月9日にスーダン共和国 (Republic of the Sudan) から独立した、世界で最も新しい国家である。2008年の国勢調査ではその人口は約800万人であった。60近くの民族が住み、それぞれ異なる言語を話す多民族、多言語国家であると言ってよい。だが南北交易や、植民地統治、その後の北部政府によるアラビア語、イスラーム化政策によって全国で共通語として口語アラビア語が話されている。公用語は英語と標準アラビア語である。2011年の独立記念式典は全世界に報道された。記憶に新しい方も多いだろう。この独立までに両「スーダン」は苦く長い歴史を経験している。

² ここで本論文の基本的用語「スーダン」に関する整理を行っておく。本論文では南スーダン独立以前のスーダン共和国領域を「スーダン」、独立以前の南スーダンに言及する際は南部スーダンとする。また現在の南スーダン共和国はそのまま南スーダン、スーダン共和国 (北部スーダン) はスーダンと呼ぶことにしたい。なお固有名詞はその表記に従う。

³ 創世記第47章に出てくる土地の名前。英語では通常Goshenと綴られるが、この教会は正式名称にバリ語の綴りを採用している。そのため本論文もそれに従う。

⁴ クク人すべてが聖公会信徒というわけではない。カジョケジには現在でも在来信仰が存在するし、ペンテコステ派やカトリックきょうと教派、ムスリムもいる。だが1955年までカジョケジには聖公会以外のキリスト教教派が存在しなかったこともあり、在来信仰を保ちつつもキリスト教洗礼を受けた者を含めればその多くが聖公会信徒である。教会ごとのメンバー数を考慮に入れていないためこの数字を以て聖公会信徒数の多さを明言することはできないが、参考としてある1ボマ領域内のキリスト教教会の配置状況を見てみると、聖公会教会4、ペンテコステ教会2、バプティスト教会1、宗派不明教会1である。このような状況を背景として本論文では聖公会に焦点を当てている。

南スーダン地図



http://southsudaninfo.net/wp-content/uploads/reference_library/maps/new_map_july9.jpgの地名などを書きかえた。

「スーダン」の歴史社会的状況は本論文の論旨を理解する上で重要な背景であるが、紙幅の関係上これについて詳しく述べることはできない。また、「スーダン」の歴史に関してはすでに多くの先達が優れた成果をあげている(Holt & Daly 2000; 栗田 2001; Johnson 2007; Collins 2008, etc.)。詳しくはそちらを参照されたい。本論文ではキリスト教との関わりから論じるに留める。

南スーダンの地にキリスト教が入るまでには19世紀、欧米列強による宣教師団による布教開始を待たねばならない。他のアフリカ諸国の例にもれず、「スーダン」におけるキリスト教の布教も植民地化と連動していた。「スーダン」の首都ハルツームに宣教師団が入るのは1848年である(Toniolo & Hill eds. 1974, 2)。だが、その活動は教育や医療といった技術的側面に限られ、布教は許されなかった。各宣教師団はハルツームを起

点として、南下をもくろんだ。1853年、現在のジュバにほど近いゴンドコロ (Gondokoro) にカトリック教団が教会を建て、布教を試みた。だがその布教は成功せず、徒労に終わった (Poggo 1999, 135-41; McEwan 1987, 37)。その後マフディーの乱を経て、1899年にイギリス・エジプト共同統治が開始されると宣教師団も再び南スーダンへの布教を試みはじめた。この時の彼らの布教は、教育とセットとなって行われた。ここから南スーダンにおけるキリスト教改宗者が少しずつ出てくるようになる⁵。

だが基本的に南スーダンにおけるキリスト教改宗の動きは極めてゆるやかであった。それが少しずつ変化していくのはおそらく第1次内戦の影響が大きい。第1次内戦はイギリスからの独立後政治的権力を握った北部政府とそれに対抗した民族解放軍、アニャニャとの戦いであった (栗本 1996, 40)。これがなぜ南スーダンにおけるキリスト教の広がりに影響を及ぼしたのかを論じるには、少し歴史をさかのぼる必要がある。

「スーダン」北部と南部はその境界地域に広がるスッドと呼ばれる湿地帯に阻まれていたため、ムハンマド・アリー朝によって植民地化されるまでほぼ交流はなかった。特に植民地化以前、南部スーダンにはシルック王国やザンデ王国といった民族ごとの王国も存在しており、「南部」という政治的一体感を感じることもなかったに違いない。「スーダン」という2011年まで続いた政治的領域が成立したのちに、イギリスは「スーダン」を同一国家として扱いつつも、1920年代から南北分断統治をはじめた。

イギリスは北部にはアラビア語、イスラームを認め、系譜の整備によって「アラブ」としての自覚を促したが、南部にはその伝播を認めず、宣教師団による下級官僚養成のための教育を主に英語と民族語で行った。これが「スーダン」における北部と南部の経済、政治的格差が生じるきっかけである (cf. 栗田 1993; 栗本 1996; Johnson 2007, etc.)。

格差を残したまま、1947年のジュバ会議において北部と南部が共に「スーダン共和国」としてイギリスから独立することが決定した。そして行政権をイギリス人からスーダン人に委譲するスーダン化 (Sudanization) の過程で、南部人は北部の支配下に置かれる恐怖を味わう (Holt & Daly 2000, 134; Johnson 2007, 27)。同時に他者として迫りくる「北部」を再認識する。独立後北部政府は南部においてアラビア語、イスラームの浸透を図ろうとし⁶、それは南部人の反発を買い⁷、内戦が激

⁵ 例えば南スーダン初の聖公会信徒となったジョン・アリオル (Jon Aruor) は1916年に洗礼を受けている (Werner et al. 2000, 253)。

⁶ その最たるものは1964年のスーダン国内における外国人宣教師の国外追放令であろう。

化した。この内戦の最中に避難先でのキリスト教との出会いや、アラビア語・イスラームへの反発を経てキリスト教徒が増えていったのである⁸。

第1次内戦は南部の自治権獲得という形で終結するが、その10年後、第2次内戦が勃発する。このとき南部人のアイデンティティの源になったのは、キリスト教と西洋文化をも取り入れた伝統的システム（Deng 1995, 205）であった⁹。

第2次内戦の主要アクターであったスーダン人民解放軍（Sudan People's Liberation Army: SPLA）には従軍司祭（Military Chaplain）が置かれ、司祭たちによる戦地にある兵士たちの慰問活動が行われていた¹⁰。生と死の狭間にあった兵士たちにとって、司祭による「救い」は一つの光明であったろう。第2次内戦が宗教戦争であったということはできないが、宗教は第2次内戦を語る上での重要要素である。

1980年代まで、基本的に「スーダン」内戦はアラブ対アフリカ、もしくはキリスト教対イスラームという二項対立的な枠組みで語られてきた（cf. Johnson 2007, vi）。この図式がもはや通用しないのは言うまでもない。だがこれまで論じてきたような歴史を鑑みれば、「スーダン」の歴史を信仰、宗教を抜きにして語ることもまた不可能であることがわかるだろう。

「スーダン」を語る上での信仰、宗教の重要性はこれまでも十分に認識されてきた。南スーダンのキリスト教に関する先行研究には一定の厚みがある。1950年ごろにはトリミングムが「スーダン」のキリスト教教会について描き（Trimingham 1948, n.d.）、70年代には宣教を目的として「スーダン」に入ったカトリック神父たちの記録を編集した『ナイル川流域のはじまり』（Toniolo & Hill eds. 1974）が出版され、80年代にはサン

⁷ このような状況は南部の一部でだけ起こったことなのではないのか、という疑問も当然生じうる。だが、中部「スーダン」に住むディンカ人を描いた著作（Deng 1995）でも、「スーダン」の最南端にあたるエクアトリア地方の状況を詳しく書いた著作（Poggo 1999）でも描かれているところを見ると、このような反発は南部の広い範囲で起こったことがわかる。

⁸ 後述するようにクク人は第1次内戦中ウガンダに避難したことで、聖公会信仰覚醒運動と出会い、キリスト教徒としての自覚を深めていった。また中部「スーダン」の青ナイル地方に住むウドゥック人の民族誌を著したウェンディ・ジェームズも1964年以降スーダン人宣教師、キリスト教徒が増えたことを描いている（James 1988, 241-52）。

⁹ 例えば現代を生きるヌエル人を描き、高い評価を得たシャロン・ハッチンソンによる民族誌『ヌエルのディレンマ』の7章では、ヌエル人の宗教について描かれる。彼女は1980年代に多くのヌエル人がキリスト教に改宗した背景を、近代医療の普及と北部スーダン政府の「アラブ・イスラーム化」政策、そして内戦への恐怖からの救済を求めたことにあると説明している（Hutchinson 1996, 299-350）。

¹⁰ 筆者のインタビューに対し、複数の司祭が戦場慰問の経験について語っている。また、スーダン聖公会ジュバ教区には従軍司祭の小教区が存在する。

ダーソン夫妻による南スーダンのキリスト教と教育、政治に関する歴史学的研究 (Sanderson & Sanderson 1981) がなされ、1990年代には南スーダン人自身もその執筆者となった「スーダンにおける信仰 (Faith in Sudan)」シリーズがナイロビで刊行された (Werner et al. 2000; Wheeler ed.1997; Nikkel 2001, etc.) ことによって各宗派の宣教史や内戦時における司祭たちの活動の様子が明らかになった。さらにはロバートO. コリンズによる南スーダン史に関する著作の中でもキリスト教について主に教育と言語との関わりから論じられている (Collins 1971, 1983)。また、「スーダン」をフィールドとする人類学者たちも、それぞれのフィールドにおけるキリスト教の浸透に目をとめ、民族誌の中で一節を設けている (Deng 1995; Hutchinson 1996; James 1988, 2007)。だが南スーダンにおけるキリスト教を中心テーマにして描いた人類学的著作がほとんどない¹¹こともあってか、先行研究においてキリスト教と他宗教、信仰との緊張、融和関係のありよう、そして近代化や内戦を背景とした改宗の情景は描かれても、キリスト教徒内部の多様性にはさほど目が配られていないように見える。だが、宣教師団が入った当時から複数の教派が存在し、内戦による避難経験者、つまり国外で宗教生活を送った人々が多く存在する南スーダンのキリスト教徒の多様性を見逃すことはできない。そしてさらにこの多様性がどのように形成されていったのか、その過程を見ていく必要がある。本論文ではクク人という一民族を対象とし、彼らの父祖の地ではなく多民族都市である南スーダンの首都ジュバに建つ教会を舞台とする。これによって他の民族との関係も視野に入れながら、一民族のキリスト教徒内部の多様性と、その異なるキリスト教徒同士の相互作用によって創りだされていくキリスト教のありようを見出すことができるようになるだろう。

¹¹ 南スーダンの宗教に関するフィールド調査を基にした研究は、エヴァンス・プリチャードの『ヌアー人の宗教』をはじめとてかなりの蓄積がある。だが、キリスト教と在来信仰とのシンクレティズム、改宗の過程等は論じられるものの、キリスト教信仰、実践そのものを中心に扱った著作は管見の限りほとんどない。例外はマーク・ニッケルによる『ディンカ・クリスティアニティ』(Nikkel 1993) である。アメリカ人宣教師であったニッケルは、この著作において自身が深く関わったディンカ人のキリスト教信仰と実践の歴史と実際についての詳細なデータを提示している。だが、この著作も筆者が宣教師であったという背景から、カトリックと聖公会を共に扱いながらもディンカ人キリスト教徒を一枚岩的に描いてしまったという面があるのは否めない。

2. クク人の移住とキリスト教化の過程

2.1 クク人とは誰か

クク人とは、南スーダン—ウガンダの国境に位置する中央エクアトリア州 (Central Equatoria State) カジョケジ郡(Kajo-keji County)を父祖の地とする人々である。主な生業は農耕、牧畜であるが、現在では国際機関や省庁などに勤める人も多い。言語は東ナイル系のバリ語である。バリ語はエクアトリア地方¹²の7つから8つの民族が話す言語で、民族ごとに方言がある。この方言は各民族を分ける指標ともなる。クク人は自らの言語を指してクク語と言う場合もあるが、バリ語という場合もある。これはその場の状況によるものだろう。クク人が、いつクク人としてのアイデンティティを持ったのかは定かではない。だが、1850年代から奴隷商人がこの地域に入っていたこと (Leopold 2005, 126)、1910年には西洋人の手によってクク人の民族誌 (Plas 1910) が書かれていることを考慮すれば、1900年代には、クク人がクク人として他者である西洋人やアラブ人に認識されていたと考えることができる。

カジョケジ郡の住人はほとんどクク人で占められる¹³。その人口は2008年の国勢調査では約20万人であった。南スーダンにおいては民族間関係が当該地域の政治社会状況形成に大きく関わると言われるが、「カジョケジでは他の民族との関わりが (他の地域と比べて) あまりない」という声が多く聞かれる。だが隣接するマディ (Madi) 人とは土地を巡って争いがあったという。一方、マディ、クク間の通婚も多い。

カジョケジ郡はその下部行政単位として5つのパヤム (Payam) ¹⁴を持つ。各パヤムの下にはボマ (Boma) があり、ボマはいくつかの村を統括している。村は大概1クランで構成され、村長はクランの首長である。結婚式や葬式はクランの行事として行われる。各クランの成員はそれぞれ牛を持ち、それはクランごとに管理される¹⁵。また、各郡には行政長

¹² 南スーダンの西エクアトリア、中央エクアトリア、東エクアトリアの3州にわたる領域。

¹³ 本論文ではカジョケジ郡、もしくは教区の構成員をクク人と捉えている。ジュバのクク人にとってこの図式は自明のものである。だがこの見方は正確ではないかもしれない。カジョケジ郡のニエボ・パヤム在住者、および出身者は自身を「(クク人ではなく) ニエボ人である」と言う場合もある。またいくつかの文献はニエボ人をクク人と区別している (Stigand 1923, 34; Ahmed 1984, 37)。一方これまで筆者が出会ったクク人は「カジョケジに住む人は隣接する郡から来た人を除いてすべてクク人である」と言う。またニエボ出身者であっても自分はクク人であるという場合もある。果たしてカジョケジ郡=クク人という図式はどこまで妥当なのか。この点に関しては、パヤム同士の関係も含めさらなる調査が必要である。

¹⁴ カナボ1 (Kanapo 1)、カナボ2 (Kanapo 2)、リレ (Rile)、リウオロ (Liwolo)、ニエボ (Nyepo)。

¹⁵ 牛の所有権は基本的に男性が持つ。筆者は女性が牛の所有権を持つ事例を知らないが、女性が所有権を持つことができないのかどうかについて確認はしなかった。

官が置かれるが、それとは別に首長の代表としての大首長も置かれている。首長たちはクランの統治と共に、パヤムやボマ、郡といった行政とクランの人員との橋渡しの役目も担う。この統治システムは植民地時代にイギリス政庁が行った間接統治の方法を、SPLAが継承し手を加え発展させた（Rolandsen 2005, 30）もので、南スーダンのほぼ全域がこのシステムによって統治されていると考えられる。

2.2 神を愛する人々へ：クク人の移住とキリスト教

ウガンダのアジュマニ県（Adjumani District）で出会ったあるマディ人は、クク人を評してこう言った。「ああ、クク人はここに大勢いるよ。タウンの一角はクク人で占められているところもある。ここでビジネスをしているんだ。彼らはビジネスと、そして神を愛する人々だ」。

そしてアルア県（Arua District）から司祭や教会指導者の妻たちのワークショップのためにアジュマニに派遣されてきたウガンダ教会（Church of Uganda）の女性司祭もこう言う。「彼ら（クク人）は神を愛する人々よ。そして本当に教会によく来る人々だわ」。

このように現在クク人は他者から神を愛する人々と形容されることがある。宗派は異なれどその多くがキリスト教徒である¹⁶。だがカジョケジにキリスト教が入ってから、まだ100年も経っていない。彼らはいかにして「神を愛する人々」と形容されるようになっていったのか。本節ではカジョケジにおけるキリスト教の歴史を簡単に述べた後に、それをクク人の移動との関わりから見ていきたい。

1910年に現在のカジョケジ郡の領域を含むラド・エンクレイブ（Lado Enclave）と呼ばれる地域がベルギーから返還され、イギリス領になった。1914年、ウガンダとスーダンの国境も引きなおされ、現在の南スーダン－ウガンダ国境が画定する。クク人は「スーダン人」となった。もちろんクク人は国境が画定する以前からウガンダ－スーダン間を行き来していたであろう。だがそれは自分たちのよりよい生活を求めてであったにせよ、都市を目指すものではなかった。彼らがより程度の高い教育や現金収入を求めて見知らぬ都市を目指すようになるのには、キ

¹⁶ カジョケジ郡人口における帰属宗教の割合は現在のところ不明。だが筆者がカジョケジで会った人で洗礼名を持たない人がいなかったこと、カジョケジ郡の宗教を管轄する役所がカジョケジにおけるキリスト教徒の割合を7割と見ていること、明らかにキリスト教教会がモスクよりも多いことを考えると、その人口にキリスト教徒が占める割合は高いと考えられる。キリスト教内の教派ごとの割合については先述したように聖公会が多数を占めると考えられる。

リスト教と共にやってきた近代教育の存在を知り、現金経済が浸透することが必要だった。

1929年にイギリス国教会宣教協会 (Church Missionary Society: CMS) の宣教師、ウィリアム・ジフ (William Giff) が2人の南部スーダン人教師と共にジュバからやってきて、キリラ (Kirila) と呼ばれる場所に伝道所と学校を建てた。ジフがCMSへの報告書で「私の主な仕事は教育だ」と述べるように、クク人が宣教師団の逗留を認めた理由はキリスト教布教の必要性を認めたためというよりは近代教育を求めたためであった。だがその近代教育の基底には聖書があった。生徒たちは、聖書を読むために文字を教えられたのである。そして学校で教育を受けたクク人が休みごとに故郷の村で説教を行ったという。1931年のクリスマス、はじめてクク人の洗礼が行われた。ここからわかるように今でこそ熱心なキリスト教徒として知られるクク人であるが、はじめからキリスト教を受け入れたわけではない。カジョケジには先祖崇拜、雨乞いの祈祷師、呪術師といった在来信仰が広がっていた。また、クク人の西洋人への懐疑心、環境の違いによる宣教師の病気などといった理由から宣教活動は思うように進まず、宣教師団がカジョケジに入ってから、最初の洗礼が行われるまでに2年の歳月を要した¹⁷。それ以後もクク人のキリスト教化は緩やかに進んでいった。

カジョケジで教育を受けた最初の世代が中、高等教育を受けるために、または現金収入を得るためにカジョケジを離れ、都市へと向かうようになるのは1940年代から50年代であろう。

聖公会ジュバ教区に勤めるある司祭は、1953年に教育を受けるためにジュバに来たという。また、現在カジョケジで雑貨屋を営む人は、両親が1952年にウガンダの首都カンパラにほど近いブゲレレという街に現金収入を求めて移住したため、そこで生まれたという。ブゲレレ、そしてこれもカンパラに近いムコノには今でもクク人の集落があると聞く。これ以後就学、就職のための移住は後を絶たなかった。

またカジョケジは南スーダン—ウガンダの国境地帯に位置し、戦略上の要所と見なされたため、南北内戦の激戦地となった。第1次内戦中はアニャニャの指導者ジョセフ・ラグによってカジョケジに兵士が派遣され、政府軍との戦いの場になり (Poggio 1999, 158)、第2次内戦中は1987年の戦闘によって行政機能を失った後、1990年にSPLAがカジョケジを奪取するが、1994年には猛攻撃をかけた政府軍の手に再び落ちる。そして1997年の「落雷作戦 (Operation Thunderbolt)」によってSPLAがカジ

¹⁷ 参考、*CMS Annual Letter Kajo-kaji Station 1930-32* (Duku 2001)。

ョケジを再び奪回し、カジョケジに平和が訪れるまで彼らは故郷に戻ることはできなかった (cf. Johnson 2007; Rolandsen 2005)。この内戦による避難がクク人の移動に拍車をかけた。

第1次内戦時はウガンダに避難した人が多かったと考えられる。現在50代以上のクク人で、ウガンダ在住経験を持たない人を探すのは困難である¹⁸。人々はカジョケジに隣接するモヨ県(Moyo District)やアジュマニ県の難民キャンプ、もしくは先に移住していた親戚を頼ってブゲレレやムコノ、アルアといったウガンダの都市に逃れた。壮年層のクク人の多くはガンダ語、マディ語、スワヒリ語といったウガンダで話される言葉を話すことができる、もしくは話せたと言う¹⁹。そしてこのクク人のウガンダへの移住は思わぬ副産物をもたらした。当時ウガンダでは1920年代末から始まった聖公会の信仰覚醒運動が勢いを増していた。クク人は移住先でこの信仰覚醒運動に出会い、多くの人がこの運動に参加していく。

1972年にアディス・アベバ協定によって平和が訪れたカジョケジに戻った人々は、ウガンダで知り得た「神の福音」を伝え、在来信仰を信じる人々、そして「うわべだけのキリスト教徒」と戦った²⁰。この活動の結果、カジョケジ全域にキリスト教が広まることとなった²¹。1986年、ついにカジョケジは一教区となり、リバイバル・コンベンションも開催された。だが皮肉なことにその翌年、カジョケジはSPLAと政府軍の激戦地となり、多くの人々が再びカジョケジを離れなくてはならなくなった。

圧倒的にウガンダへの避難者が多かった第1次内戦時と比べ第2次内戦時は行く先が多様化した。もちろん地理的条件上、ウガンダに逃れる人が多かったのは否めないが、ジュバ、ハルツーム、そしてアメリカ、

¹⁸ 現在40代半ばの人々が、初等―中等教育をカジョケジで受けることができた唯一の年代である。40代後半を過ぎるとウガンダで初等教育を受けている場合が多く、40代前半は高校在学中にカジョケジが戦場になったため、ウガンダに逃れざるを得ずカジョケジで学業を続けることは不可能であった。現在45歳前後の人は中等教育を終えた後に高等教育を受けるためにジュバに出る、という移動パターンを取ることが多く、ウガンダ在住経験がない人も一定数存在する。

¹⁹ クク人たちが植民地化以前からマディ語を話すことができたのかどうかは筆者にはわからない。だが現在カジョケジ郡にマディ語を話すことができる人が相当数いるのは事実であり、それは近年の避難、移住故であることは確かである。

²⁰ 現在のスーダン福音覚醒運動 (Sudan Evangelical Revival Movement: SRM) のカジョケジ支部代表は、避難先であったウガンダのモヨ県で信仰覚醒運動に出会い、アディス・アベバ協定締結後に避難先からカジョケジに戻り、ブゲレレから戻った人と共に活動をはじめた。(2012年5月19日、リバイバルセンターにおけるカジョケジ地区代表へのインタビュー)

²¹ 1978年に聖書のバリ語翻訳がなされていることもこのようなキリスト教の広がりとは無関係ではないだろう。訳者の一人は後に南部スーダン最大の神学校、ビショップ・ギョウイニ・カレッジの校長となるクク人、ビナイア・ドゥク・ポグゴ (Benaia Duku Poggo) である。

イギリスへと行き先が分かれるようになった。特に都市として発展しつつあったジュバへの移住が彼らを更に遠くへと向かわせる遠因になった。

3. ジュバ：都市に生きるクク人

3.1 ジュバのクク人

2011年7月に独立した新生南スーダン共和国の首都となったジュバは、南スーダン、もしくは南部スーダンの中心都市でありながら、長らく内戦の敵対勢力であった北部政府軍の支配下にあった街である。その人口は2008年の国勢調査では約37万人²²。もともとはバリ人の土地であったが、植民地化、都市化によって「スーダン」の各民族はもとより、東アフリカ諸国の諸民族が住まう多民族都市となっている。

ナイル川沿いに位置したゴンドコロが当初イギリスによる南部スーダン征服の拠点となった。ジュバはそのゴンドコロより少し南に位置し、1920年にCMSの学校が置かれ（Collins 1971, 320）、1927年にモンガラ州（Mongalla Province）の州都となるのが決定したのをきっかけに都市として整備されていった²³。だが南部スーダン、特にエクアトリア地方の中心都市でありながら、そのインフラ整備は一向に進まなかった。それでも植民地化と共に「都市」として創りだされていったこの街と南スーダンの人々は自分たちなりの付き合いを続けてきた。

クク人は早い人で1940年代後半から50年代にジュバへの移住を始めている。それが加速するのが70年代であると考えられる。その根拠となるのは、実際70年代に移住したクク人たちの自己を評する言葉である。

1970年代後半にジュバに移住したクク人たちは自身を「私たちはとても早い時期にジュバに移住した」と評する。この自己評価をどこまで当てにしているのかは意見が分かるところであろうが、1960年代にカジョケジにおいて戦闘が激化したこと、および1972年のアディス・アベバ協定によって明文的にジュバが南部スーダンの首都となり、都市開発が開始され（栗本 1996, 26）、1977年にはジュバ大学が創設されるといった要素を考えれば、70年代にジュバへの移住が本格化したと考えられな

²² ジュバ郡全体。国内避難民も含む。だが、国内避難民、難民の帰還によってその数は相当流動的である。

²³ 植民地政府の年次レポート、*Report on the Finance, Administration and Condition of the Sudan*によれば、1927年に州都をモンガラからジュバに移す決定がなされ、正式に移ったのは1930年である。

くもない。実際、1980年代にクク人による礼拝がジュバで組織されている。そしてこのような民族ごとの礼拝を行うのはクク人だけではなく、カクワ (Kakwa) 人やディンカ (Dinka) 人、モル (Moru) 人なども行っていた。つまり80年代にはジュバがすでに多民族都市となっていたといえることができる。

だがジュバもまた、内戦から逃れることはできなかった。1990年代、ジュバはSPLAの猛烈な攻撃を受ける (Johnson 2007, 202)。さらに政府軍による住宅の接収も行われた。人々はジュバからさらに逃れ、ハルツームやウガンダ、第3国に行かなければならなかった²⁴。

2005年の包括的和平協定 (Comprehensive Peace Agreement: CPA) が締結され、SPLAがジュバに入ったことによって、ジュバに平和が訪れ、人々も戻り始めた。ジュバ在住経験があるクク人はもちろん、ウガンダで生まれ育った人であっても避難先からジュバへ「帰る」場合も多い。ジュバは今、カジョケジに次いでクク人人口が多い場所であるようだ。

このような移住の歴史を経た現在、ジュバにおけるクク人の拠点教会となる聖公会ゴシェニ教会には様々な「避難、移住の経験」を持った人が集まる。

3.2 ジュバにおいてクク人として生きるということ

ジュバとカジョケジはやはり「異なる」場所である。幼少時に両親の仕事の都合でジュバに来たというあるクク人女性は、ジュバとカジョケジとの生活習慣の違いを口にしながらこう言った。

うちの母はね、私がモロコシを機械で製粉するのを見て、「あんたはすっかり怠け者になったね。カジョケジではみんな自分で製粉したのに」というのよ。でも私はこう言ったの。「お母さん、私はもう都会の人間なのよ」。

また、クランごとに村を構成するカジョケジとは異なり、ジュバではクラン単位で集住することはなく、家族ごとに分散して家を持つ。親戚同士で近くに住む場合もあるが、たいていはジュバに住み始めた時期や、交通の利便性によって住む場所を決めている²⁵。そして何よりもジュバは南スーダン中の民族はおろか、ケニア、ウガンダといった近隣諸国か

²⁴ 本論文はジュバ在住のクク人に焦点を当てるため、他の場所での避難生活については必要な個所以外言及しない。ハルツームのクク人に関しては (飛内 2011) を参照のこと。

²⁵ ムヌキ・パヤムのマレーシア市場の近くにはクク人が集住する地区もある。筆者が確かめた限りでは10家族以上が住んでいる。

ら来た人も住む多民族都市である。隣がディンカ人であったり、ヌエル人であることは珍しくない。近所づきあいもあり、子どもたちは学校で異なる民族出身の友人を作る。さらにバリ語（クク語）が主流言語となるカジョケジに対し、ジュバではジュバ・アラビア語²⁶が共通語として流通している。ジュバで育つククの子どものたちの第一言語は間違いなくジュバ・アラビア語である²⁷。また、ハルツームで育ち、ジュバに「帰還」した若年層はバリ語を話せない場合がある。だがジュバに住むクク人も自身がクク人であることを認める。これはなぜか。

筆者が確認した限り、ジュバに明文化された形でのククのコミュニティはない²⁸。これは成員権等の規定が明文化された文書を基にしたクク・コミュニティが置かれ、ハルツームの居住地域を基準に首長が置かれていたハルツームの状況との大きな違いである。

ジュバにおいてクク人がクク人として生きていくために大きな役割を果たすのは、故郷カジョケジのクランである。ジュバにおいても結婚式や葬式はカジョケジにおけるクランごとに行われる。もちろんカジョケジでの結婚式や葬式より来る人に多様性は見られるが、基本的には「クランの行事」なのである。また、カジョケジからジュバまで直線距離にして100km強、バスで片道約5時間、80ポンド（約1280円）である。親戚の車に便乗できる場合もある。そのためジュバのクク人は結婚式、葬式のたびにカジョケジに行く。また、仕事や学業の都合でカジョケジから親戚がジュバに来た場合、ジュバに住むクク人は当然のように部屋を提供する。つまり、カジョケジ—ジュバ間の人の行き来はかなり頻繁である。それは当然、クラン内部の結びつきを強くする。このような家庭環境の中で生活していれば、ジュバ生まれの若年層であってもクク人であることを意識せずにはいられない。

このような故郷カジョケジとの結びつきと共に、ジュバのクク人をクク人たらしめている要因の一つが「クク人の教会」聖公会ゴシェニ教会とカジョケジ教区ジュバ支部であると言えよう。

²⁶ 主にエクアトリア地方で使われるアラビア語のピジン・クレオール。アラビア語スーダン方言の影響が強いが、エクアトリア出身者はスーダン方言とジュバ・アラビア語を峻別する。

²⁷ だがこれはジュバでバリ語が流通していないということではない。バリ語は現在でもジュバの有力言語のひとつであるといえることができる。ジュバの言語状況（使用、態度）については別稿を改めたい。

²⁸ ジュバに首長は存在する。だがハルツームで首長が担っていたような婚姻届の受付といった公的な役割を持つわけではない。

4. ジュバのクク人とキリスト教²⁹

4.1 ジュバで見出されたクク：カジョケジ教区ジュバ支部

ジュバ国際空港から空港通りを南に下った、官公庁街の向かいにあたる場所一かつては南部各地からの避難民の集住地区であった—に赤い屋根の大きな教会が見える。それが聖公会ゴシェニ教会である。そのゴシェニ教会のすぐ裏手にコンクリート建ての小さな建物がある。そこが聖公会カジョケジ教区ジュバ支部事務所（Diocese of Kajo-keji Liaison Office³⁰）である。ゴシェニ教会はジュバ教区に属する。司祭もジュバ教区から派遣される。だがゴシェニの敷地内に立つこのカジョケジ教区の事務所は、ゴシェニがクク人の教会であることをあらためて想起させる。このカジョケジ教区ジュバ支部はゴシェニ教会設立以前からクク人の信仰の拠り所として機能してきた。そして教会設立後は教会と共にジュバにおけるクク人の拠点となってきた。

支部に勤める司祭によると、支部の前身は、1983年から始まったカジョケジ集会（Kajo-keji Convention）である。もともとジュバに出てきたクク人はクク人同士で集まってフェローシップと呼ばれる祈りの場を設けていた。それを当時ジュバ教区で奉職していた後の初代カジョケジ教区主教マナセ・ビンニ（Manasse Binyi）ともう一人の司祭が中心となって組織化し、カジョケジ集会と呼び、後に小学校を建て、1990年にはそれがカジョケジ信徒会（Kajo-keji Congregation）となった。1990年代には6つから7つの地区ごとに活動が行われ、各地区は活動報告書を信徒会に提出しなければならなかった。

このカジョケジ信徒会がカジョケジ教区ジュバ支部として現在のよ
うな形で活動するようになるのは2005年である³¹。きっかけは聖公会ジュバ教区が教区内での他教区の活動、特に礼拝を禁じたことだった。これを機にカジョケジ教区のジュバ支部となり、精神的救済ではなく、物理的発展を担う組織となった。現在支部で働いているのは5人のクク人である。彼らの給料はすべてカジョケジ教区から出ている。現在支部の

²⁹ ここでスーダン聖公会の組織について説明しておく。2011年現在スーダン聖公会は31の教区を持つ。それぞれの教区は独自に運営されており、教区内の小教区を管轄し、各教会に司祭を派遣している。各教会は礼拝で集められた献金の30%を教区に納める義務がある。（cf. スーダン聖公会ホームページ <http://www.sudan.anglican.org> 最終閲覧日2013.1.5）

³⁰ 英語名をそのまま訳せばカジョケジ教区ジュバ連絡事務所となるが、その活動内容を鑑みてジュバ支部と訳出している。

³¹ このカジョケジ信徒会からカジョケジ教区ジュバ支部になる時期に関しては諸説ある。カジョケジ教区の職員が書いた支部に関するレポートには、マナセがフェローシップを組織化した時点でカジョケジ教区支部となったと記されている。

活動は学校、ホテル、店舗運営、およびジュバにおける教区の資金集めである。集められた資金、そしてホテル等の運営によって得られた収益の内10%はカジョケジ教区に行く。それ以外にカジョケジ教区とスーダン管区との橋渡し役も担う。例えば、教区が管区にレポートを提出したい場合、教区支部の職員がレポートを管区に提出に行く、といった具合である。これをある司祭は「教区支部はカジョケジ教区のジュバにおける大使館のようなものだ」と評した³²。

4.2 ゴシェニ教会

4.2.1 「避難民の教会」としての出発：設立経緯

1990年1月、カジョケジにおいて人々が戦火を逃れ、身を寄せていた軍所有バラックの一つをSPLAの兵士が占拠した。そこを出ざるを得なかった人々は、兵士の先導を頼って夜通し歩き続けた。そして辿りついたジュバの一角を人々はゴシェニと呼んだ。そしてその場に萱葺き屋根の教会を建てた³³。教会はゴシェニと名付けられた…

その当時ジュバにいたクク人はもちろん、いなかった人でさえこの話を知っている。

クク人による礼拝が行われていたとはいえ、このときまでジュバにクク人が主に集まる教会はなかった。クク人たちは英語、バリ語で礼拝を行う教会に通っていた。だが、同じバリ語で礼拝がおこなわれるとはいえ、クク語ではないため礼拝参加者は「説教が完全に理解できない」という不満を抱えることになった。

同じころ、ゴシェニ教会の近くには他の地域での戦闘を逃れてジュバにきた人々も住んでいた。人々はそれぞれの民族ごとに教会を建てた。クク人もその流れに乗ったのだとも言える。

その後ゴシェニ教会設立のニュースは人づてに広まり、これまで他の教会に通っていたジュバ在住のクク人たちが集まりはじめた。そこから次第にククの教会としてのゴシェニ、というイメージがジュバの住人の中に広がり始める。

³² 2012年7月17日、カジョケジ教区ジュバ支部事務所における職員へのインタビュー

³³ 1990年1月、SPLAが政府軍からカジョケジを奪取していた。このジュバへの避難は当然ながらこの出来事を背景としていると考えうる。なぜ着いた先が政府軍の拠点であるジュバだったのか。この疑問に答えてくれた人はいなかった。1990年代のジュバにおける南部人の生活は、当時の彼らの置かれた状況の複雑さもあっていまだ不明の点が多い。

4.2.2 ゴシエニはジュバのクク人にいかに「作用」するのか： 教会への関わり方の違い

ゴシエニがククの教会として見なされるようになる一方、ジュバに住んでいるクク人であってもゴシエニのメンバーではない人も当然ながら存在する。例えば聖公会信徒ではない人々や、自分の家の近くの教会に通う人、そして英語もバリ語もわからない人々などがそれに該当する。だが能動的か受動的かの差、もしくは程度の差はあれ、彼らもゴシエニに関わらずにジュバで暮らすことはできない。

ある一家族の例をあげよう。家族Aは通常父、母、娘、その子ども2人、父の兄弟の妻、その親戚と娘の9人でムヌキ・パヤムに暮らしている。父母の子ども3人はウガンダで教育を受けているため通常不在であるが、クリスマス休暇などの時には帰宅する。また、カジョケジから時折父の親戚が訪れる。

このうち父、母がゴシエニのメンバーである。娘は家からゴシエニに行く交通費の問題で家の近くの教会に通っている。父の兄弟の妻はマディ人で、カトリックであるため、別の教会に通っている。その娘は聖公会信徒だが、ハルツームで育ち、アラビア語で教育を受けたこともあって、英語、バリ語能力が弱く、ゴシエニに足しげくは通っていない。

このように一家族の中で通う教会はもちろんのこと、信仰する教派が異なることも一般的である。逆に言えば、ジュバに住むクク人家族で、家族の中にゴシエニのメンバーがいないことは稀なのである。

父母が主日礼拝に行けば、その日家でゴシエニの話題が出る。クリスマスやイースターといった大きな行事の日には、カジョケジやウガンダから来た親戚、兄弟たちと共に、普段はあまり教会に行かない者であっても当然のようにゴシエニに行く。バリ語や英語が十分に理解できない場合でもその時行く教会はゴシエニなのである。そして他教派の信徒であってもククの一員である限り、ゴシエニで催されるカジョケジやククに関わる行事に行くこともある。

このように程度の濃淡こそあれ、ジュバに住むクク人にとってゴシエニは避けて通れない場所となっている。

4.2.3 運営と委員会

現在ゴシエニ教会は英語、バリ語の2言語による礼拝を行っている。英語が日曜の朝8時から10時半、バリ語が11時から1時半までである。もともとはバリ語礼拝のみ行われていたが、CPA締結によってジュバの人口が増え、ゴシエニの礼拝に来る人も増えたため、2006年に英語礼拝を始

めることにした。なぜバリ語礼拝を2回行わず、英語礼拝にしたのか、という筆者の疑問に対し、司祭の一人は「学生や、官庁街から来る外国人のため」と説明していた。

運営は礼拝ごとに行われる。司祭は英語礼拝、バリ語礼拝それぞれに所属しており、聖歌リーダーや、聖書朗読者、説教者を手配し、礼拝運営を担う。この司祭たち以外に礼拝運営をつかさどるのが、バリ語礼拝に関しては小教区協議委員会 (Parish Council Committee: PCC)、英語礼拝に関しては英語礼拝委員会 (English Service Committee) である。ただし英語礼拝委員会のメンバーはPCCのメンバーでもある。これらの委員会は礼拝運営だけではなく、教会の土地確保や、建物整備といった物理的な問題に対してもイニシアチブを取る。委員会のメンバーは全員クク人である。

ゴシェニ教会のメンバーは英語礼拝が約600人、バリ語礼拝が500人と言われている。正式なメンバー登録は2012年6月に始まった。だが、拝時にメンバー登録用紙は配られたものの、その回収率はあまり良くなかったと聞いている。そのためメンバーのうち何パーセントをクク人が占めているのかは分からない。とはいえ、半径500メートル以内にモル、ザンデ、カクワといった各民族が集まる教会があること³⁴、バリ語話者以外も来るはずの英語礼拝を運営する委員会のメンバーも全員クク人であることを考えると、かなりの割合がクク人で占められていると考えられる。

また、教会はマザーズ・ユニオン、ユース、サンデー・スクール、ヤング・ファミリー³⁵といった教会運営に携わるグループを持つ。また、「スーダン」の信仰覚醒運動の一大グループSRMの下部組織もゴシェニ独自の地区を持っている。教会でのイベントがある際は各グループの代表者が集まり、特別委員会が開かれる。

4.2.4 ゴシェニに関わる人々

・司祭たち

筆者がジュバを去った2012年8月の時点で、ゴシェニ教会には7人の司祭がいたと言われる。だがこの数は相当流動的である。なぜなら引退司祭

³⁴ 筆者が確かめた限りでは、ゴシェニ教会から歩いて10分以内のところに教派は異なるが、カクワ、ポジュル (Pojuulu)、モル、ザンデ (Zande) 人がそれぞれ集まる教会がある。またエチオピア正教、セブンスデー・アドヴェンチスト教会も存在する。

³⁵ バリ語礼拝の司祭入場を先導する役目を持つ聖歌隊。参加資格が、まだ子どもが小さい新しい家族の一員であることから、ヤング・ファミリーと言われる。マザーズ・ユニオンとメンバーがかなり重なる。

や、他の教会で奉職していても、英語の礼拝にのみ参加していることによって、ゴシェニのメンバーにゴシェニの司祭と考えられている場合もあるからだ。このうち正式にジュバ教区から派遣されているのは4人であった。2人はクク人、残りがホジュール、カクワ人である。だがホジュール、カクワ人の司祭たちは主日礼拝には参加するもののその他の教会行事にはほとんど顔を出さない。その一方カジョケジ教区支部にも勤める2人のクク人司祭はほぼ毎日教区事務所で働き、教会運営のアドバイザーともなっている。また他の教会に所属するクク人司祭もしばしば教区事務所に顔を出し、教会運営に発言力を持っている。さらに教会の設立代表者ですでに引退し教会の敷地内に住むP司祭は、教会運営の様々な場面でその意見が求められている。

・リバイバリスト：ゴシェニを創りだした人々

日曜のバリ語礼拝時、教会の祭壇から向かって左側は真っ白のワンピースを着た女性たちで埋まる。彼女たちはリバイバリストであり、多くが30代後半以上の壮年層である³⁶。

さて、リバイバリストとは誰か。「スーダン」の文脈において簡単に説明すれば、幼児洗礼を受けただけではなく、自分の意思で「神」の存在を受け入れ、神に従うことを決意し、「救済された人」となり、且つSRMのメンバーになった人³⁷、ということができるだろう。

SRMはウガンダで1930年代に始まった聖公会信仰覚醒運動の流れをくむ組織で、現在南スーダンにジュバ、カジョケジを含む5つの地区を持つ³⁸。本部はジュバにある。

前述したように多くのクク人がウガンダに避難した際にリバイバリストになった。またリバイバリスト達は第一次内戦終了後カジョケジに戻り、人々に「人生を改めること」を説き続けた。第2次内戦中もSRMの勢いは止まらず、そのメンバーは増え続け、南スーダンだけではなく、

³⁶ 誤解のないよう言い添えれば、確かにリバイバリストに女性が占める率が高いが、男性がいけないわけではない。ただ、男性は女性のように白い服を着ることがないので視覚的に目立たないだけである。

³⁷ タンザニアやウガンダでは唯一神とそのひとり子の存在を受け入れ、罪の告白を行い、「救済された人」を英語でリバイバリスト、もしくはガンダ語でバロコレ (balokole)、アチョリ語でモロコレ (morokole) と呼ぶが、「スーダン」、特に中央エクアトリア州では信仰を改め、SRMのメンバーになった人をリバイバリストと呼ぶ。だが、現在信仰を改めたがSRMに参加しない人も若年層を中心に増えている。彼らは単にボーン・アゲインと呼ばれることが多い。

³⁸ 南スーダン独立以前にはハルツームにもSRMの支部があったが、独立と共に閉鎖された。

それぞれの避難先でも活動が続けられた³⁹。現在カジョケジには、宿泊所や礼拝堂も完備したリバイバルセンターが建設されており、宿泊施設がないジュバの本部に代わってワークショップなどを開催することもある。

SRMのジュバ地区は5つから6つの支部を持つ。それぞれその土地の名前をつけられているがゴシェニ支部だけが教会名が地区名となっている。つまりゴシェニだけが一教会で一地区を構成している。SRMのゴシェニ支部のメンバーは、現在100人以上となっており、毎週主日礼拝のあと、メンバーによる会合と礼拝を行っている。

リバイバリスト達は教会運営に積極的に関わる。ゴシェニ設立者の多くがリバイバリストであり、PCCの委員長も含め、教会運営の主軸となる人々の多くもまたリバイバリストである。彼らにとって教会はリバイバルの精神を伝えるための格好の舞台なのである。

だが彼らの多くが壮年層以上であることからわかるとおり、SRMが若者の心を捉えることができていないのもまた事実である。

・一般信徒：変わりゆく礼拝のスタイルと保たれる「ククの教会」

ゴシェニ教会の主日礼拝にはクク人がジュバ全域から来る。またカジョケジから、もしくは避難、移住先から短期でジュバを訪れたクク人の多くがゴシェニをジュバでの礼拝先を選ぶ。

彼ら一般信徒は主に年代層によって分けることができる。多くが英語礼拝に参加する10代～30代前半の若年層と、バリ語礼拝に参加する割合が多い30代後半以上の壮、老年層である。子どもたちは親、もしくは兄弟の参加する礼拝に連れられていくため、英語、バリ語両方の礼拝にいる。もちろん英語、バリ語で年齢層がはっきり分かれるわけではない。英語ができない若者がバリ語礼拝に参加する場合、英語ができる壮年層が英語礼拝に参加する場合もあるが、その参加者層の違いは一目瞭然である。クク人の壮年層は英語に堪能な人が多い。また、バリ語を話せる若者も多い。なぜ、彼らはバリ語礼拝を、英語礼拝を選ぶのか。それは、礼拝のスタイルの違いによるものだろう。

³⁹ 現在SRMは聖公会ジュバ教区事務所の一角を事務所としており、聖公会スーダン管区との関係も深い。一方、SRMだけが「スーダン」の信仰覚醒運動の担い手であったわけではなく、その多層性も考慮する必要がある。「スーダン」のキリスト教信仰覚醒運動に関しては稿を改めて論じたい。ここでは簡単な概要のみを記述するに留める。

あるクク人女性（20歳、ウガンダで育ち中等学校1年で中退、英語、バリ語、マディ語を話すことができる）は「（バリ語を話すことができるのに）なぜ英語礼拝に行くのか」と聞いた筆者に対し、「だって私はバリ語の聖書を読めないもの」と答えた。また別のクク人男性（21歳、ウガンダで教育を受けている。英語、バリ語を話すことができる。中等学校在学中）は「バリ語の礼拝は長すぎる」と答えた。それに対し、壮年層からは「英語礼拝は好かない」という声が聞かれた。その理由は、「あっさりと終わってしまっただけで礼拝をした気分にならない」であった。

スタイルとは何か。具体的に言えば礼拝時に使われる聖書、聖歌、ダンス、そして時間感覚である。

表1 礼拝のスタイル

	バリ語礼拝	英語礼拝
進行言語	バリ語	英語
聖歌	バリ語、 太鼓の伴奏	英語、 ジュバ・アラビア語 電子ピアノの伴奏
聖書	バリ語	英語
時間	11時—13, 4時、 しばしば礼拝時間が延びる。	8時半—10時半、 大抵時間通りに終わる。
祈祷書	バリ語	英語

筆者作成

バリ語礼拝ではバリ語、英語礼拝では英語の聖書が使われる。祈祷書も同様である。聖歌もバリ語礼拝ではバリ語の聖歌が太鼓に合わせて歌われるのに対し、英語礼拝では英語かジュバ・アラビア語の聖歌が電子ピアノの伴奏に合わせて歌われる。また、通常2時間以上、時には3時間近くかかるバリ語礼拝に対し、英語礼拝は1時間半から2時間できっちり終わる。そしてバリ語の聖書を読むには話せる人であっても一定期間の練習が必要である。ウガンダやケニアで英語による教育を受けた若年層は、英語の聖書を読むことはできてもバリ語の聖書を読むことができない場合が多い。逆に学校教育がまだそれほど普及していなかったころに生まれた壮年層にはバリ語しか読めない人も多いためである。このような事情からバリ語礼拝と英語礼拝で参加者の年齢層が違ってくると思われる。そして彼ら自身も「バリ語礼拝は壮年層、英語礼拝は若年層中心」という意識を持っている。だがむしろ注目すべきは年齢そのものよりも各年齢層の背景にある「経験」である。バリ語礼拝を好む壮年層の多くは、1970年代以降のリバイバル運動とその礼拝スタイルをリアルタ

イムで経験、共有してきた。それに対し、若年層の多くはウガンダやケニアで近代的教育を受け、合理性や効率や時間感覚といった「西洋的」価値観を体得している。それが礼拝スタイルを選ぶ際の指標となっていると考えられる。

基本的に英語礼拝とバリ語礼拝の運営は別個に行われるが、お互いにゴシェニの一員であるという意識は持つ。また、バリ語礼拝の要となるリバイバリストは自身を「生まれ変わった人 (Repenter, Löpuggö Töili⁴⁰)」と見なし、他のキリスト教徒にも生まれ変わることを推奨するが、それが強制されることはない⁴¹。神とそのひとり子の存在を受け入れた人、というキリスト教徒の定義はゴシェニのメンバーに共有され、リバイバリスト、もしくはボーン・アゲインの誕生は教会全体で歓迎される。教会でのイベントの際は必ず運営を担ったグループがそうでないグループを招待する。教会の運営は壮年層が担うが、常に若者の意見を聞こうとする。つまり教会メンバー内の差異は認識されているものの、彼らはゴシェニ教会メンバーとしての一体感を創りだそうとしている。そして大きなイベントの際は合同で礼拝を行う場合もある。その際は双方のスタイルを取り入れようとするのである。それは「ククの教会」一員としての一体感を人々にもたらすと共に、必然的に礼拝スタイルの変容をもたらす。

5. カジョケジとジュバの間

5.1 「ククの教会」としてのゴシェニ教会

筆者がカジョケジに滞在していた時、教会関係者の中でゴシェニの話題がよく出た。あるとき主教はジュバから戻ったスタッフのゴシェニに関する話を聞きながら、ふと「あれはもうククの教会だ」とつぶやいた。また、ゴシェニ教会で出会ったカジョケジ教区に勤める司祭は、教会の建物を見ながら「ゴシェニはジュバ教区に属しているけど、この土地はカジョケジ教区のものなんだよ」と言った。これはクク人だけの認識ではない。あるときホジュールとクク人が集まるバリ語教会で「どこの教会に行っているのか」とホジュール人に聞かれた筆者が「ゴシェニに行っている」と答えると、周囲で爆笑が起こり、こう言われた。「あんたはククかい？あれはククの教会だよ」。

⁴⁰ バリ語。Löpuggö は改める、ひっくり返す、Töiliは心を意味する。

⁴¹ リバイバル運動が南スーダンに到達した初期は、教会指導者、リバイバリスト、一般信徒との間で争いがあった。

ゴシェニが建ってからすでに20年以上が経つ。2012年の時点でゴシェニはすっかり人々に「ククの教会」として認知されたように見える。

だがゴシェニはあくまでもジュバ教区の教会である。礼拝で集められた献金の30%はジュバ教区に行き、カジョケジ教区には行かない。この点から考えればカジョケジ教区とゴシェニ教会は一見、何の関係もない。ジュバにあることと、ククの教会であること一教会はどのようにしてこのバランスを取っているのだろうか。

この疑問に答えるために重要になってくるのはカジョケジ教区ジュバ支部とゴシェニ教会との関係のありようである。支部に勤める2人のクク人司祭は現在、ゴシェニ教会に正式に所属している。つまりジュバ教区が2人の司祭をゴシェニ教会の司祭として派遣しているということである。だが彼らは70年代からジュバに住み、長くゴシェニ教会と支部に関わってきている人々である⁴²。彼らは筆者に対して自分たちの状況を「精神的部分はジュバ教区、物質的部分はカジョケジ教区に属している」と説明した。彼らがジュバ教区から配置換えを言い渡されることも当然考えられるが、もしそうなっても支部の仕事には差しさわりのない。単に日曜礼拝の際には別の教会でのお勤めをするだけであるという。

だが、当然のことながら司祭たちは教区支部の事務所で日々仕事をし、英語礼拝委員会は支部の事務所で開かれ、教会の運営を担う人々は司祭を訪ねて教区事務所に来る。カジョケジ教区の新しい教区事務所設立のための献金を集めるための委員会は事務所で開かれ、ゴシェニ運営上の要人が集められた。委員長となったのは英語礼拝委員会のメンバーの一人である。そしてその献金を集めるための礼拝は、当然のようにゴシェニで行うこととなっていた。

この状況から見えてくるのは当然のことではあるが、「教会運営を行う上で精神的部分と物質的部分を分けるのは不可能」という事実である。そしてゴシェニ教会とカジョケジ教区ジュバ支部の活動は共に「クク人の活動」として人々に認知されており、教区、教会運営に直接関わる人でない限り、これらを分けて考える必要はない。以上のような支部と教会との関係のありようが、人々にゴシェニを「ククの、もしくはカジョケジの教会」として見なすよう促してきたのであろう。

⁴² インタビューの際、筆者は彼らがいつから支部に勤めているのかを聞き損ねた。そのため彼らが支部に勤め始めた正確な日付はわからない。だが少なくともクク集会から教区支部となった2005年には2人の司祭の内、1人は1990年代からゴシェニ教会のメンバーであり、支部の職員となっていた。

5.2 クク・ジュバ・南スーダンのキリスト教徒：ゴシェニ教会落成式

だが新生国家の首都ジュバに建つゴシェニ教会は、「ククの教会」という役割だけを担うわけにはいかなかった。

久しぶりにゴシェニで説教をするといった聖公会カジョケジ教区主教は、その話をカジョケジのトウモロコシからはじめた。

カジョケジのトウモロコシはそろそろ収穫をはじめるところだ。だが私は市場でいち早くトウモロコシを売る女性を見た。値段を聞いてみたら1カップ5ポンドだった。私は「そりゃジュバと同じ値段じゃないか⁴³」といった。でもこれは良いことだと私は思う。なぜなら彼女は人より早く種を植え、畑を耕したからこそ人より早く収穫を得ることができたんだ。その分の報酬は得るべきじゃないか。

ジュバの住人、特に若者たちは耕作を何かの罰だと考えているだろう？でも耕作は神の恵みだ。働いたら働いた分だけ神は私たちに恵みを下さる。

ここまでの導入は、英語礼拝でもバリ語礼拝でも同じだった。だがここから主教は英語礼拝とバリ語礼拝で異なる話をした。バリ語礼拝ではクク人なら働いて、発展をするべきだ、と「クク」を強調し、英語礼拝では、耕作＝働くこと、勉強することと捉え、一生懸命勉強して、世界を知り、いい仕事につくことが称揚された。主教は英語礼拝とバリ語礼拝の違いに十分すぎるほど敏感であった。ゴシェニが「クク人の教会」であるということのをさりげなく強調しながら、バリ語、英語それぞれの参加者に合った説教を行っていた。

そう、ゴシェニ教会は、いまや「クク人の教会」という役割だけを担っているわけではない。クク人の教会でありながら、多民族都市、そして南スーダン共和国の首都ジュバの教会でもある。人々はそれを認識しながら教会運営を行っている。それが如実に表れたのが、南スーダン独立に先立って行われたゴシェニ教会の落成式であった。教会が手狭になったため、PCCは寄付を募って教会を立て直した。2011年7月、その完成を祝って落成式が行われたのである。落成式は英語、バリ語礼拝合同で行われ、ジュバ教区主教を兼ねるスーダン管区首座主教が祝福の儀式を執り行った。この主教はディンカ人⁴⁴である。そしてジュバ教区の要

⁴³ ジュバは食料品のほとんどを近隣諸国から輸入しているため、物価、特に生鮮食料は他の地域と比べて高い。つまりカジョケジでジュバと同じ値段で食料を売れば、それは高額であると見なされる。

⁴⁴ 南スーダンの最大民族。民族語はディンカ語であり、バリ語話者ではない。

職についている人、近隣の教会のマザーズ・ユニオンやユースも来賓として招かれていた。さらに他の教会で司牧を行うクク人司祭も出席していた。以下はその内容である⁴⁵。

教会の外には天幕が張られ、教会内も天幕の下の椅子もすべて埋まり、満席状態であった。まず、歌う女性たちを案内役にして主教入場。その時歌われる歌はバリ語のものである。出迎えた司祭がジュバ・アラビア語であいさつを行う。その後主教は服を着替えて司祭たちの先導で再入場。そして水と油、そして落成式典に使われる道具すべてに祝福が与えられた。その際、祝福の言葉は英語で述べられた。その後テープカットを行って、教会内部に入り、先ほど祝福された水をまきながら入場。教会内では来賓が席についていた。聖歌隊もこの時所定の位置についた。そして主教と司祭たちが教会内にあるすべてのものを祝福⁴⁶していった。このときも祝福の言葉はすべて英語である。祝福する場所を移るたびに歌がジュバ・アラビア語で歌われた。そして主教の「奉納する前に全員で歌を主に捧げよ」という言葉があり、電子ピアノのリズムに合わせてバリ語の聖歌が歌われた。

その後クク人来賓からの言葉があった。彼はカジョケジ選出の中央エクアトリア州議員である。普段からゴシェニの礼拝によく参加している人物で、信徒代表といえるだろう。

彼ははじめに主教を筆頭としたスーダン管区から来た来賓に挨拶をし、「私は、今大きな喜びを感じている」と話をはじめた。

私は今大きな喜びを感じている。なぜなら私はこの教会の完成という神の偉大なる御業を目にしているからだ。それはアディス・アベバ協定が結ばれる前、私がまだ高校生の際に聞いた先代主教の、『今はまだ暗い夜だが、この後に来る世界はいま私たちが見ているものより素晴らしいものになるだろう』という言葉を想起させる。もしこの言葉を信じるならば、ゴシェニの美はこれまでの私たちの国の歴史で最も偉大なるものとなるはずだ。ゴシェニは祝福されている。なぜなら私たちは南部スーダンの人々が自由の身となるわずか7日前にゴシェニの完成を祝っているのだから。この事実を私たち自身に知らせることができるほど大きな喜びはない。そしてゴシェニが祝福される2つ目の理由は、ゴシェニが建つこの場所だ。ゴ

⁴⁵ 筆者はこの落成式には参加していない。そのためこの部分は落成式の記録ビデオを基に記述している。このビデオは筆者がカジョケジ滞在中、滞在していた神学校で上映されていたのを見て、データの持ち主に頼んで入手したものである。編集者を特定することはできなかった。ビデオは8つのファイルに分けて記録されており、一ファイル約30分である。落成式は朝11時過ぎから始まり、夕方まで続いたと聞いているので、おそらく3分の1ほどはカットされていると考えられる。

⁴⁶ 主教はこれを洗礼 (baptism) と言い、また祝福の最中には聖別 (consecrate) と言っていた。

シェニはこの新しい国家の権力を発揮する場のちょうど目の前にある⁴⁷。中略—私たちは困難に立ち向かう時にいつでも『私たちは神の家を完成させたのだ』ということのを思い浮かべようではないか。

さらに彼は南スーダンの大統領に言及し、彼を旧約聖書のヨシュアにたとえながら神が南スーダンを祝福していると告げた。聴衆は話の要所要所で拍手をし、賛同の意を評した。

そして次に主教からの言葉があった。彼はゴシェニに対し、教会完成への祝いの言葉をはじめに述べた。

はじめに私はこの小教区にお祝いを述べたい。新カテドラル…いや小教区という意味だが、の成功を心よりお祝いする。—中略—、私たちは協力し合おうではないか。これこそ私たちがより多くの教会を建設する唯一の道なのだ。私たちはこの新しい国を作り上げていくために協力し合おうではないか。南スーダン共和国という国を。世界にはこの国が独立することを喜ばない人々がいる。彼らに私たちにはできるということを見せようではないか。—中略—私たちは南スーダン人と見なされるようになる。私たちは国民 (nation) になるのだ。神よ私たちを祝福して下さい。祈りましょう。

これらの言葉はほぼ英語であった。ところどころでジュバ・アラビア語の通訳が入ったが、バリ語の通訳はなかった。そして主教は教会の外壁にはめ込まれた定礎板の覆いを外した。

この落成式の様子からわかることは、まず「ククの教会」としてはじまったゴシェニ教会がもうすでにジュバの、南スーダンの教会にもなっているということである。落成式にディンカ人のスーダン管区首座主教を呼ぶということは、クク人のことば、バリ語で落成式を行えなくなることの意味する。かつてはバリ語内の差異をも問題にし、クク語で礼拝を行うことを重視してきた人々が、落成式を英語、ジュバ・アラビア語で進行することに同意した。英語、バリ語礼拝はそれぞれ聖歌隊を持つが、この日は電子ピアノのリズムに合わせて英語礼拝の聖歌隊がリーダーシップを取っていた。バリ語の聖歌も歌われたが、それも太鼓の代わりにピアノの伴奏がついていた。そしてクク人の来賓によってゴシェニという一教会の落成式が、南部スーダンの苦しみと南スーダンの独立と重ねあわされて語られ、主教は南スーダンを作り上げていくための協力をゴシェニのメンバーに求めた。これまで民族の一員として生きてきた南部スーダンの人々が、南スーダン人という国民になると、クク人の教会としてみなされてきたゴシェニ教会で語るということは、聴衆にク

⁴⁷ ゴシェニ教会は官公庁が集まる地区の近くにある。

クであるよりも南スーダン人であれ、と語りかけていることに等しい。そしてこの話を人々は熱狂的に支持したのである。だが一方、人々はククであることを忘れたわけではない。落成式後、人々は教会の外でダンスと歌に興じた。そこではバリ語とジュバ・アラビア語で進行が行われていた。そして何よりもゴシェニの落成式を執り行うことは、ゴシェニに集う多様な人々に、ククとして神に感謝するという一体感を感じさせたはずである。

6. 終わりに

ここまでジュバにおけるクク人のキリスト教実践の様相を、ゴシェニ教会を主な舞台として見てきた。ここから見出されるのは、①クク人たちが移動を繰り返す中で「他者」、「外部」との出会いによってキリスト教徒としての自覚を得てきたこと、②ジュバのキリスト教徒はムスリムに相対して一体化したというだけではなく、民族ごとにキリスト教実践を行ってきた傾向が強いこと、③民族ごとにキリスト教実践を行いつつも、変化は起こりつつあり、それは異なるキリスト教経験を持つ世代間の相互作用によるものであること。そしてそれは人々を南スーダンという新国家の国民にしようとする動きを支えるものでもあること、④②、③のようなある意味相反する動きが現在「故郷」と、「都市」とのつながりによって並行的に進んでいることである。⁴⁸

独立から1年。南スーダンが歩んだ道は決して平坦なものではなかった。石油を巡ってスーダンと争い、石油精製、輸出が不可能になったため、国家収入のほぼ9割以上を石油から得ていた南スーダンの国家財政は破たん寸前になった。ジョングレイ州ではヌエル人とムルレ人との間で「部族」紛争が起り、12万人以上が避難しなければならなかった。南スーダンポンドの価値下落によって輸入品に頼るジュバの物価はウナギ登りとなり、人々は食料品の値上がりを口々に嘆く。

だが、はたからみれば苦しい1年をゴシェニに集う人々は歌い、祈って乗りきった。80年代からジュバに住むあるクク人はゴシェニに通う理由をこう語った。

⁴⁸ アフリカ都市の住人が民族による互助組織を創り上げ、故郷とのつながりを保ち続ける状況については、いくつもの先行研究がある (cf. 嶋田他 (編) 2001, etc.) 。

ククだからゴシェニに通うわけではないのよ。慣れていないから。私たちは20年以上ゴシェニに通ってきたのよ。いやなことがあってもあそこに行って、歌って踊ればすべて忘れられるの。

彼らはククだからゴシェニに行くわけではない。単に祈りの、救いの場を求めてゴシェニに集う。だが、人々が移動を繰り返す中でゴシェニは必然的にククの教会となっていく。そして南スーダンが独立国家となり、ジュバがその首都としての地位を確立したことで、今度は南スーダンの教会としての歴史をも歩みはじめていっているのである。この現在のゴシェニの姿は、改宗、内戦、避難といった歴史を背景として、今確かに南スーダンに根を張るキリスト教のありようの一端を示しているといえよう⁴⁹。

参考文献

【一次資料】

CMS Annual Letter Kajo kaji station 1930-32.

Diocese of Kajo-keji Juba Liaison Office Report, Prepared by Ven. Archdeacon Emmanuel Kenyi, Mr. Alex Achiga, Mr. Stephen Tomor, 20. December. 2010.

Opening of Gosene Church (映像資料)

Report on the Finance, Administration and Condition of the Sudan 1927, 1929, 1930.

【邦文】

栗本英世. 1996. 『民族紛争を生きる人々: 現代アフリカの国家とマイノリティー』世界思想社.

栗田禎子. 1993. 「スーダン史上におけるウルーバの意味の変遷について」酒井啓子(編)『国家・部族・アイデンティティ: アラブ社会の国家形成』アジア経済研究所.

———. 2001. 『近代スーダンにおける体制変動と民族形成』大月書店.

嶋田義仁他(編). 2001. 『アフリカの都市的世界』世界思想社.

飛内悠子. 2011. 『「国内避難民」とは誰か: スーダン共和国ハルツームにおけるクク人の歴史・生活・アイデンティティ』上智大学アジア文化研究所.

⁴⁹ クク人のキリスト教信仰が南スーダン人としてのキリスト教としてだけ存在するわけではない。移動や避難生活、そして帰還といった経験をしたククの人々がどのような「キリスト教徒」になっていったのかという問題は、筆者の博士論文の中心テーマであり、今後論じていくつもりである。

松田素二. 1999. 『抵抗する都市：ナイロビ移民の世界から』 岩波書店.

【欧文】

- Ahmed, Rafia H. 1984. Regionalism, ethnic and socio-cultural pluralism: The case of the Southern Sudan. In *Southern Sudan: Regionalism & religion*, ed. Mohamed Omer Beshir, 6-59. Khartoum: University of Khartoum.
- Collins, Robert, O. 1971. *Land beyond the rivers: The Southern Sudan, 1898-1918*. New Haven: Yale University Press.
- . 1983. *Shadows in the grass: Britain in the Southern Sudan, 1918-1956*. New Haven: Yale University Press.
- . 2008. *A History of modern Sudan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Deng, Francis M. 1995. *War of visions: Conflict of identities in the Sudan*. Washington, D.C.: The Brookings Institution.
- Duku, Oliver M. 2001. *A history of the Church in Kajo-keji*. Khartoum: New Day Publishers.
- Holt, Peter M., and Martin W. Daly. 2000. *A history of the Sudan: From the coming Islam to the present day*. Essex: Pearson Education.
- Hutchinson, Sharon E. 1996. *Nuer dilemmas: Coping with money, war and the state*. Berkeley: University of California Press.
- James, Wendy. 1988. *The listening ebony: Moral knowledge, religion, and power among the Uduk of Sudan*. Oxford: Oxford University Press.
- . 2007. *War and survival in Sudan's frontierlands: Voices from the Blue Nile*. Oxford: Oxford University Press.
- Johnson, Douglas H. 2007. *The root causes of Sudan's civil wars*. Bloomington: Indiana University Press.
- Kayanga, Samuel E., and Andrew Wheeler, eds. 1999. *But God is not defeated!: Celebrating the centenary of the Episcopal Church of the Sudan 1899-1999*. Nairobi: Paulines Publications Africa.
- Leopold, Mark. 2005. *Inside West Nile*. Oxford: James Currey.
- McEwan, Dorothea. 1987. *A Catholic Sudan dream, mission, reality: A study of the Roman Catholic Mission to Central Africa and its protection by the Hapsburg Empire from 1846 to 1900 as revealed in the correspondence of the Imperial and Royal Austro-Hungarian Consulate Khartoum*. Roma: Stabilimento Tipografico Julia s. r. l.
- Nikkel, Mark R. 1993. *Dinka Christianity: The origins and development of Christianity among the Dinka of Sudan with special reference to the Songs of Dinka Christians*. PhD Thesis: The University of Edinburgh.
- . 2001. *Dinka Christianity: The origins and development of Christianity among*

- the Dinka of Sudan with special reference to the Songs of Dinka Christians*. Nairobi: Paulines Publications Africa.
- Plas, Vanden. 1910. *Les Kuku: Possessions Anglo-Égyptiennes*. Bruxelles: Institut International de Bibliographie.
- Poggo, Scopas S. 1999. *War and conflict in the Southern Sudan, 1955-1972*. PhD Thesis: University of California.
- Rolandsen, Øyetaim H. 2005. *Guerrilla government: Political changes in the Southern Sudan during the 1990s*. Uppsala: Nordiska Afrikainstitutet.
- Sanderson, Lilian P., and Neville Sanderson. 1981. *Education, religion & politics in Southern Sudan 1899-1964*. London: Ithaca Press.
- Stigand, Chauncey H. 1923. *Equatoria: The Lado enclave*. London: Constable & Company Limited.
- Toniolo, Elias, and Richard Hill, eds. 1974. *The opening of the Nile Basin: Writings by members of the Catholic Mission to Central Africa on the geography and ethnography of the Sudan, 1842-1881*. London: C. Hurst & Company.
- Trimingham, Spencer. 1948. *The Christian approach to Islam in the Sudan*. London: Oxford University Press.
- . n.d. *The Christian Church in post war Sudan*. London: World Dominion Press.
- Werner, Roland and William Anderson, Andrew Wheeler, eds. 2000. *Day of devastation day of contentment: The history of The Sudanese Church across 2000 years*. Nairobi: Paulines Publications Africa.
- Wheeler, Andrew, ed. 1997. *Land of promise: Church growth in a Sudan at war*. Nairobi: Paulines Publications Africa.
-

Yuko Tobinai is PhD candidate of Sophia University. Her specialty is area studies of Northeast Africa, especially Greater Sudan, and anthropology of refugees/migrants, religion.